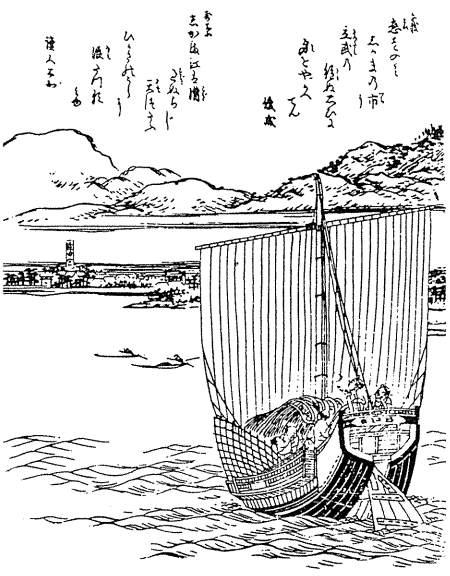
文化財見学シリーズ 34

姫路市教育委員会文化課（平成７年９月１日発行）
（平成19年２月28日改訂）

『津田・英賀』をたずねて

― あぼし道に沿って ―

古くは、あぼし道と呼び、飾磨から津田・英賀・広畑を通り、網干に達し、さらに室津に通じる姫路の海岸部を東西に伸びる道があった。周辺には菅原道真にまつわる伝承や、羽柴秀吉の攻略により開城した英賀城や、寺内町・港湾都市として栄華を誇った英賀の町と英賀本徳寺跡、風土記の時代に遡る英賀神社などの文化財があり、歴史・文化の香りが豊かな地域の一つである。現在、山陽電車や国道250号で瞬時に過ぎ去る町並みも昔の街道筋をたどり、ゆっくりと文化財を訪ね、新しい発見をしてほしい。



▲『播州名所巡覧図会』より、津田宮が描かれている。

津田の細江（飾磨区細江）

『万葉集』の山辺赤人の歌に次の句がある（橋本政次『播磨古歌考』）。

風吹けば　波かたたむと　さもらひに
都多の細江に　浦がくりをり

古代から港として利用され、菅原道真が左遷の途中に、立ち寄ったとの伝承もある。船場川の河口、思案橋の付近といわれている。

菅公坐像と歌碑（飾磨区思案橋）

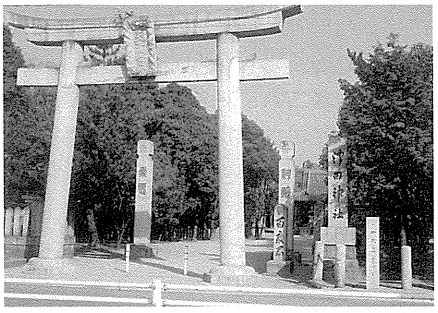
思案橋の西のたもとに、昭和37年に菅原道真綱敷の坐像がつくられている。青銅製。傍らに「史蹟菅公小憩伝説地兵庫県」（大正13年）の石標も立っている。

付近には「月見の岡」「琴弾の浦」などの伝承もあり、昭和47年には「東風　吹かばにおいおこせよ　梅の花　あるじなしとて 春を忘れそ」の歌碑もつくられた。

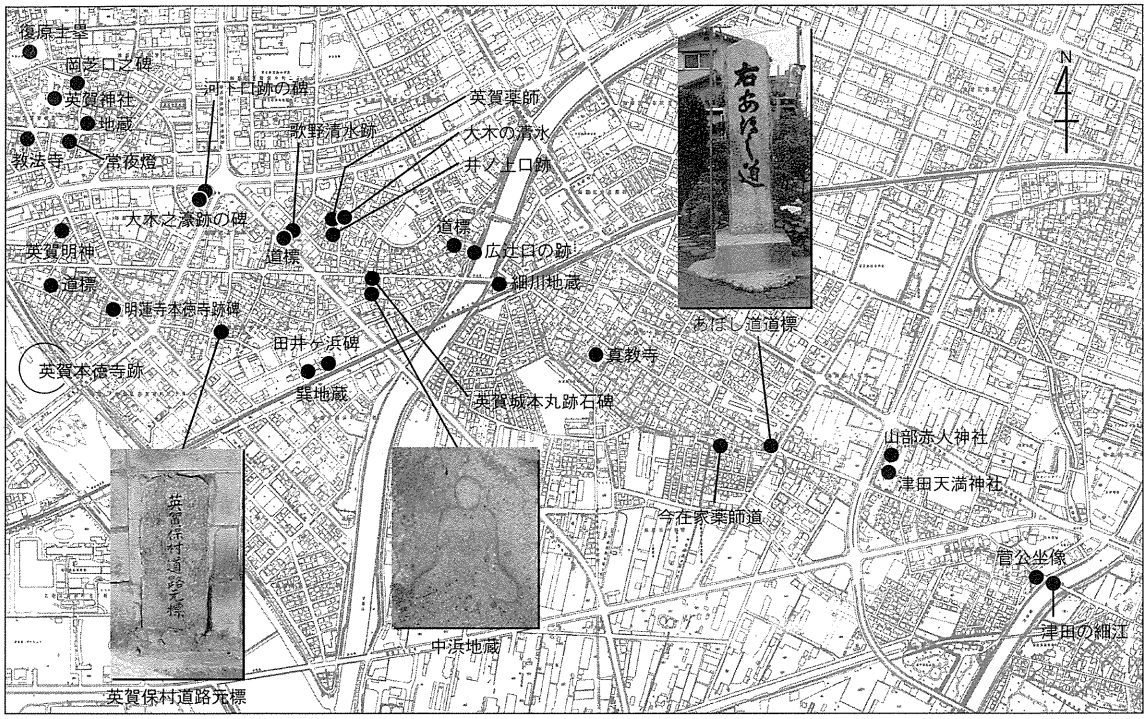
菅公坐像と歌碑

津田天満神社（飾磨区構）

俗に、「綱敷（つなじき）天神」と呼ぶ。延喜元年（901）菅原道真が、大宰府へ左遷された時、津田の細江でとも綱を敷いて休息したという伝承によるもので、その故事にちなみ道真を主神としてこの地に社を建て氏神としたものである。神社に伝わる国重要文化財の紙本著色北野天神縁起三巻の絵巻物は、永仁６年（1298）作とされ、現在は奈良国立博物館に寄託されている。社殿の内部には、その写真を掲げている。津田天満神社太鼓一対は、革であるべき部分が板で、もとは太鼓樽と称せられる酒器であったと考えられている。これには嘉吉元年（1441）の朱書があり市指定文化財になっている。境内には、文政10年（1827）の御神燈や、文化13年（1816）の手洗石がある。また、本殿左手に山部赤人神社、海神社、稲荷神社、厳島神社が並ぶ。道をこえて南側の思案橋西公園に欄干橋や鳥居、常夜燈などがある。



津田天満神社



今在家の薬師堂（飾磨区今在家）

津田天満神社西方の道標（大正9年）の左側の道を行くと薬師堂の前に出る。もと明願寺という大きな寺があり、津田千軒といわれた町の中心であったというが、英賀落城の時焼失した。本尊薬師如来は、焼失を免れ津田天満神社に祀られていたが、明治以降、この堂に祀られている（『津田のみおつくし』より）。堂裏手の集会所の脇には、津田天満神社の神主の墓碑があり、古い順に並べると、宝暦7年（1757）・天明5年（1785）・文政10年（1827）・天保5年（1834）となる。集会所西側の墓地に「諸国巡拝納経塔　当邑中屋利兵衛、滝女」などと記した碑があり、嘉永3年（1850）の年号が刻まれている。

真教寺の水盤（飾磨区今在家）　天保2年（1831）の年号がある。

細川地蔵（飾磨区今在家）

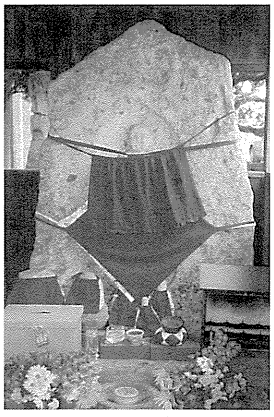
中浜橋の東畔にある。堂内の二体の地蔵像のうち、右手のものが古い。風化の進んだ凝灰岩で、頂部を三角形に整形した高さ1.5m、幅1mの石を舟形に彫りくぼめ、蓮座の上に高さ65cm、幅26cmの宝珠を持つ地蔵立像を半肉彫りにしてある。年代は不明だが室町時代のものと思われる。

英賀城本丸跡石碑（飾磨区中浜町二丁目）

英賀城であったとされる土地（字「城内」）の一角に昭和35年に建てられた碑。

従来、英賀城を紹介する文献の多くが英賀の集落全体を取り囲む土塁の内側を英賀城と評価してきた。しかし近年の研究成果によると、もともと英賀の集落は地形的に東西に続く砂堆上に島状に形成されたことが地割等から窺え、その後、港湾都市・寺内町として発展を遂げたとされる。さらに、現在残る土塁も砂堆上の集落を囲む施設であった可能性があることが指摘されている。「城内」は地名から城郭施設としての利用が想定される場所である。

英賀城は天正８年（1580）の羽柴秀吉による播磨侵攻の中で攻撃を受け開城するが、「英賀日記」などでは、このとき英賀は周囲の道場や居館などを支城とし城砦網を築いて戦ったとされる。その後、秀吉の姫路築城に伴い英賀からの町人の移住が行われた。


細川地蔵

英賀城本丸之跡石碑

大木の清水（飾磨区英賀東町一丁目）

法寿寺境内の井戸。もとは清水が湧き『由来の碑』には、狩野派画家がこの水で茶を煎じ旅の労を慰したことや、赤松義村が定めたという「播磨十水」の一つといわれていること、文政・天保の頃（19世紀前半頃）、煎湯・入浴の薬湯として知られていることなどが記されている。

法寿寺〔英賀薬師〕（飾磨区英賀東町一丁目）

昭和43年に再建された堂内の左手に薬師如来を祀った厨子がある。他に多くの仏像もあり、延宝9年（1681）寺建立の時のものと思われる。堂前の手洗鉢は、文化15年（1818）のもの。また境内の一角に英賀城主ゆかりの三木一族が、明和4年（1767）に建立した墓碑がある。南側入口には、天和3年（1683）の年号のある名号碑がある。

英賀城の堀跡と土塁

中浜町一丁目を東西に延びる溝が堀跡の一部であり、英賀薬師北側には土塁の一部が残っている。

歌乃清水の碑と道標〔英賀公民館〕（飾磨区英賀東町一丁目）

公民館前の広場に、歌野清水の碑が移されている。もとの場所は都市計画街路のため、水は枯れ、道路下になっている。道標は大正14年のもの。

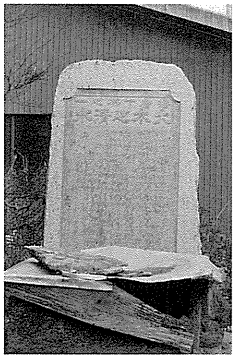
英賀神社前通りの常夜燈（飾磨区英賀宮町二丁目）

神社南側の東西道路上に２ヶ所常夜燈がある。東のものは文政2年（1819）の年号と天満宮の文字があり、西のものは文久3年（1863）の年号と「石工ひめじ□□」と刻まれている。

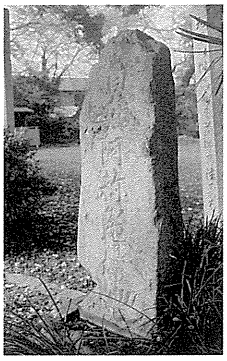
英賀神社（飾磨区英賀宮町二丁目）

社記によると、『播磨国風土記』にある英賀彦神・英賀姫神を祀る古社で英賀の里名もここから生じたという。さらに嘉吉元年（1441）英賀城主三木通近は、天満天神・八幡大神・春日大神を勧請し英賀彦神社を二丁南に移し摂社とした。明治以後、両神を本社に迎え主神としたもの。指定文化財には、国の重要文化財である正中２年（1325）銘の梵鐘と県指定の天神縁起絵巻（明徳本・永正本）がある。境内には、江戸時代の石造物として延宝８年（1680）の大鳥居や寛文７年（1667）の手水鉢や寛政６年（1794）の狛犬、文久３年（1863）の常夜燈がある。拝殿には江戸期の絵馬が多く、明治12年（1879）の算額が珍しい。本殿裏に英賀城跡の土塁が残る。

英賀神社



大木の清水

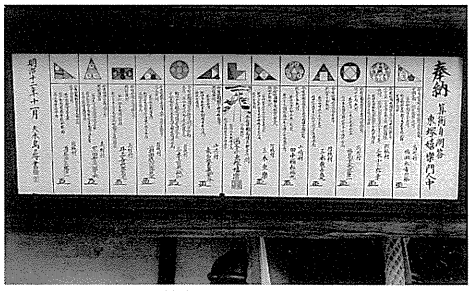


法寿寺名号碑

法寿寺（英賀薬師）堂内

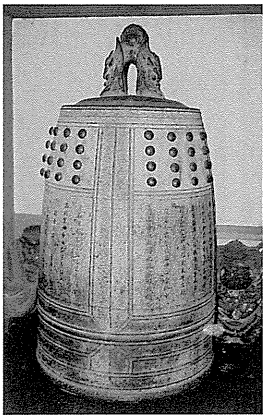
歌乃清水の碑

英賀神社前常夜燈



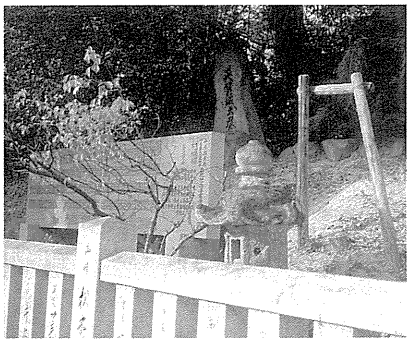
英賀神社　算額

天神縁起絵巻（明徳本）部分



◀国重要文化財　英賀神社梵鐘

▼英賀神社本殿裏の土塁



英賀城の復元土塁（飾磨区矢倉町二丁目）

英賀神社北側にある英賀公園内に、土塁の一部を復元している。このような土塁が町を取り巻いていたとされる。

光琳御殿所（飾磨区英賀宮町二丁目）

英賀神社西南方の教法寺境内に、英賀城主五世の次男、籔之内武康が、永正９年(1512)に英賀御坊の東に源正寺を開き、自分は帰依して光琳坊と称したことなどを記した石碑がある。すぐ隣に光琳坊御殿所と記された地蔵堂がある。

英賀本徳寺跡

上図のように現在、夢前川河床となっている所に英賀本徳寺(英賀御坊)があった。本徳寺は、明応年間（1492～1501)に蓮如の弟子空善が建立した寺で、蓮如の孫実玄を迎え播州浄土真宗の本拠とした。永正12年(1515)に上図の位置に英賀御坊が完成したが、羽柴秀吉の英賀城攻略の後は亀山に移った。跡地は日本製鉄広畑工場が建設された時(昭和16年)河川付け替えのため、河川敷となった。

「英賀本徳寺趾」碑〔明蓮寺境内〕(飾磨区英賀西町二丁目)

昭和3年に英賀村青年団が、英賀本徳寺跡に石碑を建てたが、昭和16年の夢前川の河川付け替えで明蓮寺の境内に移されたもの。そばに英賀保存会の副碑があり、この碑の移動の経過が記されている。明蓮寺の水盤に天保12年(1841)の年号がある。

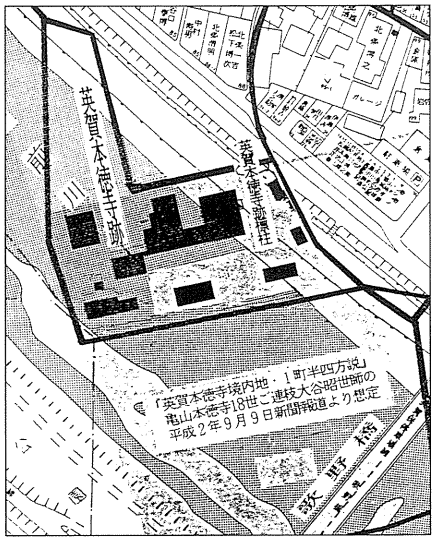
英賀明神社（飾磨区英賀西町二丁目）

英賀城主三木通近により移され摂社となった英賀彦神社の位置と考えられる。現在英賀明神と呼んでいる。御神燈は慶応２年(1866)のもの。水盤は年号がないが、江戸期のもの。

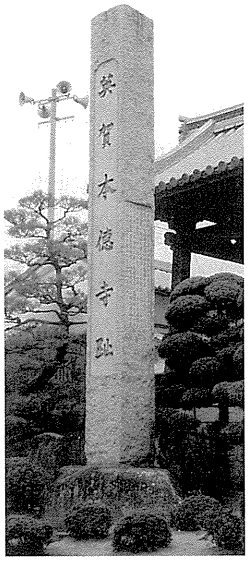
「田井ヶ浜之趾」石碑（英賀東町二丁目）

巽地蔵堂のそばにある。三木通武の時、英賀の港として開かれた場所とされる。

■編　集　　糸　田　恒　雄（姫路市文化財嘱託調査員）

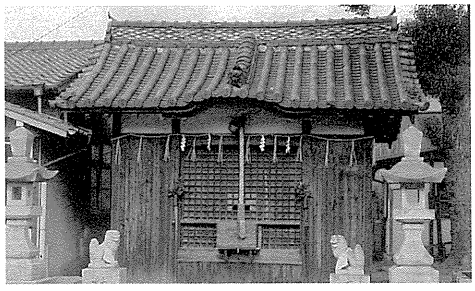


英賀本徳時跡復原図
（遠藤　博 著『測量の歴史』より）



「英賀本徳寺趾」碑
（明蓮寺境内）

「田井ヶ浜之跡」石碑



英賀明神社